

琉球大学学術リポジトリ

岸総理大臣第1次訪米関係一件 会談関係

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44205

小川アジアニ課長の米側との会談録

國務省支那局長ラルフ・クラフとの会談要旨

三三.七.四
（ラルフ・クラフ
小川記）

ラルフ・クラフは國務省の支那エクスパートにて香港領事、ナシ
・ナル・ウオリー・カレッジ研修、ジョンソン大使の米中会談初代随員
支那局長を経て最近支那局長となつた。小川とは香港時代面識あ
り、又、今春極東旅行の際も面談している。

第一回は、總理到着の前日、大使館が予めアレンジしていたので
往訪したが会談前であつたので政策問題には触れず、最近の台湾中
共における事件について意見を交換した。（六月十七日約四十分）

日本議員フォード同席。

クラフが去る四月東京訪問後香港台湾を訪問せるにより小川より
台湾の印象、台北事件について觀察を質した。クラフは台湾訪問は
事件前であつたが、経済的に安定していると見た。又、中国人台湾

人の間も（東京にて小川より充分注意すべき点と指摘しておいたので）出来るだけ観察した。なる程必しもしつくり行つてはいないよ
りだが、次第に融和しつつあり、言葉もわかるようになり、兵役に
より同化しているので特にシリアスな点はないと思ふと述べた。小
川より兵役の点は融和によい面はあるも國府全体としては問題の種
を多くし恐い面も見逃せないと述べたところ同感していた。

暴動事件については政府、党の興与について如何に考えられるや
と問ふたところ、その懸念なく、自然発生的な裁判に対する不満と
みているとのみ答えた。小川より中国人がうつせました不満と、政
府の無能に対する反感との懸念であり、その点政府や党の一部が關
係してはなかつたと言えないと述べたところ、それらの点はこれか
ら公判を遂じ資料が出てくるので研究する要があると述べていた。

最近ニ、イヨイタ・タイムズがワルソール篇として伝えた毛沢東の「人民内部の矛盾」の内容について置したところ、それは昨夜北京放送により全文が發表され、目下対照して研究中であると述べた。

最近の民主黨派の共産黨批判について如何に見られるやと置したところ、右は共産黨の筋書きであり、批判をさせてこれを再批判し諷を指摘するといふ方法と見てゐる、新聞に發表されることを自體が全て共産黨の筋書きであると思はばならぬ、もし本當の批判であれば新聞に出さぬであらうと述べ、併しこれも更に研究をつづける必要があると述べた。

岸首相の行幕終り次第更に面談を絶して別れた。

第二回は会談終了後前回の約束に基き六月二十一日午後訪問を終了した。その要旨左のとおり。(約一時間)

クラブより總理とダレスの会談¹⁵如何と問うたので、先程終了した模様で、コミューンも大体会意が出来た様子である。經此成功であつたと見られるが、支那問題については、安全保障、領土問題等に意外に時間をとつたため遺憾をがら深く討論される暇がなかつたようであると述べ、クラブは自分も詳しくはフォローしてゐないが貿易については話が出たように聞いていると述べた。

クラブより前回新聞となつた毛沢東演説は讀まれたか、その印象は如何と問うたので、ニートヨトク・タイムスに上り一讀した。併し大体の模様はわかれわれが推測してゐたのと合つていて、昨年末頃よりの言説がとりまとめられたもので非常に目新しいというわけだ。

はをいと思ひ。それよりも先にワルソイ電が伝えたところと大抵異
つており、例えば八十万兩^清のどとき事項が在いが、原演説に削除
したものがあつたように思われる。もししかりとすればその理由は知
何に思われるかと問うたところ、削除したことは原放棄にかいても
言つてゐる。但しどの部分を削除したとは言つてゐない。今回の分
を見るにワルソイ電はいささか疑はしく思われる。ワルソイから來
た電報は英國人でタイムスのために通譯してゐる男のものである。
この男が、原演説を都合のいいように取捨選択したか、又は今まで
他の演説（三月の分は未だ公表されな）や話をつぎ合せてつくつ
たか、あるいはそもそもポランド側で適當につくつて流したか
いづれかであると思われる。と述べた。最近に演説等は行われるとす
ぐ発表されるのだ、この演説だけ発表をかくらせ、しかも削除して

この時機に発表した意味を如何に思われるか。ワルソール電で漏れたためかと聞うたところ。

その点は多分^分にあらうと思う。併しやはりはじめに知られたものに就しその反響をみていたのではないかと思う。李晋の動向として適当なりと判断して今回発表したのではないかと思うと述べた。

小川より前回は台湾事件等で意見を交換したが、自分らはどうしても台湾の状況が心配である。現状維持が続けられればまだよろしいが、今のよりをやり方では中共の平和攻勢は歩一歩と影響力を強くするのではないかと思う。今のうちに何とか台湾を固める必要があると思ふと述べたところ。自分らはさして危いと思つてはいない。

前回は述べたごとく経済的には安定に向つており、台湾人も徐々に政治分野にもとり入れられつつあり、中共の平和攻勢もさしたる

影響を与えていたかと思ふと述べた。

小川より、極端な例をとれば、もし蔣介石に万一のことあらば、忽ち後継問題等を急端に現政府がグテつくこととせらう。この点如何に見られるやと述べたところ、蔣介石に万一のことがあれば政府としては何くなるから困つたことであるが併しいづれ後継者により極^既定方針がうけつがれるであろうから非常に心配することはないのではなにかと答えた。小川より、その後継者が確定するまでが問題にて、例えば蔣経國と陳誠とが後継をもちそい、いづれか一方にきまつたとしても他方は、蔣介石に対するととく服従するといふことは不可能で、ここに中共に走る最大の危険が生じると思ふが如何だと述べたところ、その可能性については一応肯定していた。併し、しからばといつて、貴君が前回東京において示されたこととく

二つの中国に持つて行くことは、国共両者が承認せざるのみならず、結局国民政府の威信と力を弱めることになり、反つて中共につけこませることになるので賛成出来ぬし、又中共を納得させることも困難であると述べた。

二つの中国とすることは決して國府をいし台湾政府の威信を弱めぬ。米國ではしきりに東南アジア諸國に悪影響を与えらるゝといつてゐるが、現状はむしろ東南アジア諸國の大部分は米國が無理押しをして國民政府を形式的にせよ中国大陸にまで主權を及ぼす國家として行動させようといふところに、不快を感じ反感をもつてゐるので、もしこれが台端を主宰する國家といふすつまゝした形におさめれば、東南アジア諸國は反つてその合理的態度に非常に好感をもち、米國の立場も國府の立場もよくなるし、東南アの気分も開くものである。

と述べたところから、チヤフはそのよりを國はビルマとインドネシアの
なりと言つたので、インド、パキスタン、セイロン等は如何と聞
たところ、それらは東南アジアに非ず、しかも中共の影響力からは
遠く差違つての對象とするには適當でないと思ふと述べた。

「これは泰國の暹東關係が、右三國を舍んでいまいたために暹東關
係の研究の對象とまつていまいたためである。小川よりわが方はパキ
スタンまでをアジア局で扱い、やはり中共問題についても、これらの國
面を一語に考ふる必要ある旨述べたところ、それはそのとおりだが、
いざれにしても、インド、パキスタンにはビルマのごとき中共の直
接の感威がないので事情は異ると主張していた。又、これらの國は
中共と人の往来が頻繁にあれば、たやすく赤化されるをそれが強い
ことを懸念すると述べていた。」

中共が如何にして執得するか。この点で議論が出、クラフは中共はあれだけ台湾解放を言っているのだから、例え武力を用いてもこれを取らうとしているので、要諦には感じないと論じた。小川より必しもしからず、もち論三十年、五十年の先のことは別として、例えば國運加入、自由各國の承認、禁輸解除等の提案でこれを自由諸國體に運ぶるようになれば、必しも当分台湾の引離されることに同意しないことはなく、この間において米國のやり方が一番重要な要素となると思う。又、このような状態にすれば中ソ關係も微妙に変化して来る。もし、米國が常に言つておられる中共内部の變化といふことも起り得る可能性があると述べた。クラフはこれに対し國運加入は台湾と取引する程中共が強い興味をもつていないのではまいかとの事述べ、他は意見を述べなかつた。

よつて小川より、米國は中共の變ぼうをねらつて強圧政策をとつ
ているが、自分の見るところではそれは成功していきなうと思ふ。む
しろ中共にタルミのみま^る今日自由世界の風を送りこむ方がこれを
促進出来るのではないかと述べたところ、クラフは、自分も決して
米國の政策で中共が變化すると思つてゐるのではないが、緩和政策
でもこれは越せない、むしろそれは中共政府に利用されるだけであ
る。中共の變化は自然に起るのを待つ以外になく、外部からの強圧
政策、又は緩和政策はさして影響を与えないと思ふと述べ併しこの
間には、少くとも中共に利用されるようなやり方はとるべきでない
と考へてゐると述べた。(この点はロバートソン等の発言と大分ニ
ムアンスが異つてゐると思はれる。)

小川より、ひつこいようであるが、今までのやり方で現状を維持

出来るという米國の考え方は心配でならず、台湾を自由陣營に確保しおく必要については自分らは米國に劣らず痛感しているので、今後とも充分意見を交換したいと述べたところ、クラフもその点は同感にて、幸い在日大使館には支那問題に詳しいマドハート書記官もいることゆえ卒直を意見交換を続けたいと述べていたが、積極的に日本の意見を求めて参考にしたいという熱心さは見えなかつた。

（この時ロバートソンより電話ありたる模様で会談を終つた。）

（付、ハワード・ボアマンとの会談）

（ボアマンは中共北京^支役人の頃の北京大使館員にて引揚後直接ホン
コン領事館に転任、米ホンコン領事館の中共調査機構をつくりあげ
た）

一九五四年フォード財団の基金でコロンビア大学で研究、一九五
六年国務省をやめコロンビア大学で中国研究をつづけている。新道
の中国問題研究者である。

小川とは香港時代の関係。

今回ニュー・ヨーク滞在中面談した。

小川より、ワシントンにてクラブといろいろ話をしたがある点で
はロバートソンより固いところがあるように思受けられたと述べた
ところ、ボは、クラブの傾向については一応肯定し、併し現在国務

省員は極めて微妙な立場にある。米国の中国政策については、メレ
スヤロバートソンにより表明されている枠内で物を言わねばならぬ
ので勢いそうなると思うと述べた。

最近の中共内部の民主批判については、小川より、はじめから仕
組んだ芝居であるにしては、共産党側からの再批判があまりに手ま
びし過ぎると思うと述べたところ、自分もその感じあり、民主党派
の批判を求めたところ、その批判が行き過ぎてあわてて手綱をしめ
直したというのではないかと思うが、とにかく研究に値すると思う
と述べた。

米国の政策が現状のまままでゆけるかどうか甚だ心配であると思
べたところ、自分らも心配だ。米国のことと米大國はもつと世界情勢に
フレキシブルな対応をする必要があると思う。

中共が崩れる如きことはないので、むしろこれが将来アジアでどういう地位を占めて行くか—その他でアジアの状況に強い影響を与えるのは、日本とインドであろう。インドネシアもそうかもしれない—ということをよく検討して、これに応じた対策をたてるべきだ
と思う。台湾だけを支持して将来どうなるであろうかと述べていた。
米國従来の強硬策が中共にさして影響を与えおらずむしろ中ソの強化に役立つていると思うがと述べたのに対し、自分も米國の政策には強い疑問をもっている。強圧により中ソをわけるといふことは不可能であろうと思うと述べ、この点でもフレクシビリティが必要であると述べた。

最近米國でも中國問題についていろいろ変つた意見が出ているかと質したところ、いろいろインタレストを持つているものが多いの

動きを見ているので、中共びいまとも言えないが、勿論国府に味方
していると見るのは楽観的にすぎるし、東南ア諸国の問題は、米田
として（前述のとかり）もつと大勢を見て柔軟性をもつべきだと思
うと述べていた。